〔書　評〕

辻村敏樹著「敬語の史的研究」

山崎久之

一

敬語研究に長年にわたって、着々として研究の成果を挙げてこられた辻村敏樹教授が、今回『敬語の史的研究』を刊行せられた。この書は、現代（明治以後）の敬語に関する既発表の論文中「比較的一般的なもの」を集めて刊行された前書『現代の敬語』に引き続いて、これに収めたくてもできなかった論文を「改めて一本としたい」（前書「あとがき」）という氏の願いが発展し、結実したものである。書名は「敬語の史的研究」であるが、そしてその論文が中心となっているが、敬語史以外の論文も、巧みにアレンジされていて、魅力のあるまとまった論文集となっている。

まず、その構成を見ると、所収19編の論文を三部に分けて配列し、これに付録が添えられ最後に25ページにわたる索引が加えられてこの書の利用価値を高めている。

次に所収論文名の実際を示して、若干説明を加えてみよう。（付記の数字は各部の使用ページ数である）

Ⅰ　敬語の本質　19
待遇表現
言語過程説における詞・辞の分類と敬語
いわゆる敬譲の助動詞について
敬語の成立と転移の原則
Ⅱ　敬語の歴史　243
上代敬語の特質
記紀に見える「意礼」について
敬語接頭辞「お」について
吉利支丹関係資料に見える敬語接頭辞について
「貴様」の変遷
近世後期の待遇表現
『浮世風呂』・『浮世床』の敬語
「お……になる」考
「です」の用法―近世語から現代語へ―
手紙の敬語
Ⅲ　敬語研究史
敬語研究の歴史
敬語関係書目解題

書評
付録
敬語変遷一覧表

右の19編の論文は、近代語学会発表の原稿に手を入れられた「吉利支丹関係資料に見える敬語接頭辞について」を除けば、昭和22年から昭和42年の21年間にわたって発表された論文である。また取り上げられた時代は、上代より現代に及んで、氏の研究領域の広いことを示している。そしてその大部分は、研究雑誌に発表されたものであるので、この書においての計算で、多くは二十数ページの手頃な長さで読みやすい量である。これは氏独得の平易流麗な表現と相まって、読者に親しみを感じさせる原因になっていると思える。しかし、この長所は、観点を変えると欠点になりかねない。執筆ページの制限は、問題を徹底的に心ゆくまで究明することを妨げ、勢い要領よくまとめる結果となったり、表題として掲げた研究事項についても、観点を一点にしぼり、全面的にこれを取り扱う自由が制限される結果となるからである。この点、この論文集が研究書としての重厚さと、多面性について物足りなさを感ずるとしても、やむをえないことだと考えなければなるまい。

二

第一部とも言うべき「I敬語の本質」は、本書構成上細心・巧みな配慮がなされている部分であるが、また著者の敬語に対する基本的姿勢を明らかにしているところでもある。この点に言及してみよう。

氏は、早稲田大学においての卒業論文「上代敬語における動詞語法」は金田一京助博士の指導を受けられ、その影響を受けられたであろうが、最近は時枝誠記博士に接しられ、特に同博士が早稲田大学教授となられた後は、その影響を受けられたと推察せられる恵まれた学問的環境にあった方である。これは、本書の「あとがき」によってもうかがい知られる。しかし、このお二方は、敬語に対する考え方については、根本的に異なる見解を持たれていた。この間にあって、辻村教授はどんな見解姿勢を確立していられるかは、読者の側からみて重要なことであるが、著者としても、まず示しておきたかったことであろう。

時枝博士の詞・辞の区別と敬語との関係は一応さておくとしても、敬語の考え方の根底に大きな二つの対立がある。つまり、話手又はそれに準ずる「自」の素材の表現と、「他」つまり、対称や、それに準ずる他称の尊敬すべき素材とを区別する意識、簡単に言えば、自・他の区別意識を、敬語の第一義的意識として認めるかどうかである。この点については、金田一京助博士は認める立場であり、時枝誠記博士は認めない立場である。そして辻村氏の立場は第一義としては認めない立場である。この点敬語の氏の分類は時枝博士の影響下にあると推察される。また「敬語の成立と転移の原則」は、敬語の成立を転移の面から見て、原則を立てようと試みた論文であるが、この一般言語学的研究法による究明は、金田一博士の「国語音韻論」を思い浮かべさせ、その影響の一面を見ることができる。敬語の研究は、敬語が待遇表現の一部であるという本質に言及することなしには論じられない。これはまた敬語は待遇表現全体の一部として把握しなければならない本質を持つことであり、これは敬語史研究にも無視できないポイントである。特に「敬語の成立

の問題」に関してはきわめて肝要である。この論文もこの方面への配慮・考察も加えられていて結構であるが、氏の研究が、さらにこの方面において展開して行くことを期待している。

三

本書の中心は、10編の論文よりなる「Ⅱ敬語の歴史」の部分である。この中には、「貴様の変遷」「『お―になる』考」などのように筆者の推賞してやまない論文も含まれている。

およそ、過去の敬語の研究は、現代語の敬語の研究が出発点にならなければならいことはいうまでもない。この点、氏は既述のように『現代の敬語』においてまとめていられるように、その研究に従事され大きな成果を挙げてこられている。この点、氏は有利な研究条件を具えていられる。しかし現代人の敬語意識は直ちに、過去の人々の敬語意識と同一ではない。過去の人々の言語意識の実態を現代人の敬語意識に左右されることなく、その姿のままに明らかにするのが過去の敬語の共時的研究であり、その意識の展開に裏付けられた敬語の変化・無変化の姿が敬語の歴史である。この点からは、現代語の敬語意識を把握する作業の終わった後に、いかにそれと離れ、過去の事実のままに把握することが出来るかが問題である。このためには過去の敬語意識を客観的に把握する特別の方法が考究されなければならない。たとえば、敬語には、よそゆきことば（晴の敬語）通常普通のことば（褻の敬語）もあるし、同じ敬語と言っても、その尊卑・優劣・親疎の程度も一通りではない。また他面公卿ことば・武士ことば・町人ことばなど位相によっての差があり、そのために語感の差が生ずるなど、現代語には認めがたい、又は認められない諸種の問題がある。しかも敬語は待遇表現の一種であるから、敬語の発生・衰微・廃滅の姿だけでも、敬語になりうる非敬語（平常語）はどんな性質の語であるかが問題となり、これと関係付けなければならない。これら過去の事実を、あらゆる面から客観的に把握する方法を講じなければならない。

右は、わずか二、三の点だけを参考のため指摘したにとどまるのであるが、それだけでも敬語の史的研究は非常に困難な問題であり、多くの学者の努力にもかかわらず不明の点が多すぎるのも止むを得ないことである。氏のこの難問への突撃の姿をここにみるのである。

食事の意味の「めし」に式享三馬の時代に「お」が付いて、「おめし」という事実から、その時代の「『めし』という語の（待遇価値が現代人の語感と異なっていて、それ）が今日ほど下落していなかった証拠になる」（231ぺ）（カッコ内筆者付記）と言っていられるのも、過去の言語事実のありのままの姿と当時の語構成から客観的に考察しようとする氏の研究法の一つである。

また、敬意の程度や、表現の硬軟、あらたまりなどについては、その判定の根拠を、社会的身分関係に中心を置き、用例の実態から帰納する方法が取られている。たとえば、「お―になる」の幕末における表現価値について「それは主として女中や乳母、手代等の奉公人が主家の人のことについて言っている例が断然多い所から、敬意も高い改まった言い方であったことを知るのである。」（261ぺ）

ここでは、社会の身分関係の外に、例の多少ということが判定の条件になっている。これらは多くの人には理解されやすい方法である。こうして、氏のすぐれた研究が展開している。

しかし、このような観点だけで、過去の言語事実の実態を、現代語の敬語意識の目に曇らされることなく、見究めることができるかどうか、筆者には不安である。少なくとも説得力がやや薄くなるのではないかと思われる。

四

敬語の歴史の研究は多くの学者によって進められて来ているが、これらを類別すると大略次のようになる。まず既述の一般言語学的研究を除くと、過去の特定の時期の敬語の共時的研究の外に、通時的研究として次のようなものがある。①敬語の語彙交替の面からの研究、②敬語の語史的研究、③敬語法の面からの研究、④敬語意識の変化の面からの研究などである。①は各時代の敬語の座にある語彙を全面的に記述し、それらを比較し、その交替変遷を説明しようとするものである。②はある敬語の発生の時期・場所・事情・伝播・衰微・復活・廃滅の諸相、またこれらの原因を、待遇価値・文法的性質・音韻上の変遷などの観点を加えて述べるもの、③は敬語そのものの文法的性質の変遷を取り扱うもの（たとえば敬語の呼応の法則の変遷など）④はそれぞれ各時代の敬語はその時代の敬語意識に支えられて成立している。そしてその意識は時代により変遷がある。このような意識の変遷として敬語の歴史を捕えようとするものである。（参照山崎「敬語の変遷」『講座現代語』巻2）これは敬語を体系として把握することになり、待遇表現の一部分として敬語を把握しなければならなくなる。これは敬語体系の史的研究と呼んでよいと思う。以上述べた四種のものは本質的には相互に連関があり、相互に補うものであるから、どの面に重点を置いて研究するかの差になるべきものであろう。しかし現状においてはかなりはっきりと孤立している別々の研究となっている。

さて辻村氏の研究であるが、付録の「敬語変遷一覧表」は①の研究である。（これについては更に後述）そして、Ⓐ「上代敬語の特質」Ⓑ「近世後期の待遇表現」（昭34・10）Ⓒ「『浮世風呂』『浮世床』の敬語」（昭29・3）は共時的研究といってよい。しかしその取り扱う態度は語彙的である。たとえばⒷにおいては、「近世後期のことばの一様相を明らかにする」ために(1)その表現が現代において一般的なこと、(2)ただし、語形または用法が近世後期になって現われたことの二つの条件で選び出された敬語の㈠「お―になる」㈡「でいらっしゃる」㈢「お―いたす」㈣「です」を取り上げている。Ⓒにおいては、一接頭辞では、①「お」「ご」②「おん」「み」「おみ」「ぎょ」等、二接尾辞では①「さま」「さん」②「どの」「どん」③「がた」「ども」付「たち」「ら」を取りあげ、三動詞語法では、①「お―遊ばす」②「（お）…なさる」③「お―だ」他④「て下さる」他⑤諸種の敬語動詞⑥「れる」「られる」及び「しゃる」「さっしゃる」（以上尊敬表現）や①「いただく」「たべる」②「いたす」「申す」③「ござる」「ございます」「でござりやす」等④「ます」「やす」⑤「です」「でゐす」等多くの敬語について言及しているが、どこまでもそれぞれの語彙としての研究の立場である。これは「貴様の変遷」「『お―になる』考」「『です』の用法」（語法的な面を中心とした考察である）などが、特定の一単語・一表現形式の素晴らしい研究として見事な開花を示しているのと、本質的に同一であると考えられるようであるので、本書所収の論文においての氏の研究態度の中心は、語彙史的研究であると言える。（これはあるいはこ

れら論文が、研究雑誌や記念論文集といった「許された紙数」（230ページ）の制限のための不本意の結果であるかもしれない。）次に「貴様の変遷」と「『お―になる』考」についてその輝かしい成果について述べる順序になったが、前者については筆者がその研究視点が多面点であり、その研究が着実である点などからしばしば推賞して来ているし、紙数に余裕がないためここでは割愛して、後者について、紹介してみることにする。

氏の「お―になる」形式の歴史の研究は、①昭和26年発表の「『お―になる』考」にくわしいが、また②昭和34年の「近世後期の待遇表現」③昭和36年の「現代敬語の傾向」でも展開を見せている。この展開の一端に触れると、この表現形式の口語の初出例について、①では天保12年刊「末摘花四編上」の例であるとした（259）のに対して、②では湯沢幸吉郎氏の「江戸言葉の研究」（昭和29年刊）所引の例から、天保7年刊「いろは文庫初編」の例を補うとともに、さらに補充例を追加し、そして今回の刊行において、①に「追記」を加えて、天保4年の「人間万事虚誕計」の例を小松寿雄氏の論文（昭和41年）から追加している。そして巻末の「敬語変遷一覧表」（昭和42年）においては、この最後の例を用例出典として挙げている。また、その使用状況については、①では「一応江戸時代末期に一つの尊敬表現の様式として完成された。しかしそれはまだ一般的に用いられるには余りに微弱な存在であったようである。」（271）と、しめくくったのに対して、②では「前記論文作成当時予想したより、もうすこし広くこの『お―になる』形式は用いられていたようです。」（213）と展開させている。さらにまたこの表現形式の生命力の強弱については、①においては、明治になってから普通の会話語としては「お―なさる」形式をしのいで、優勢になったのは明治40年後であると述べるのに引きつづいて、③においては、「お―なさる」「られる」「お―遊ばす」の三表現形式と比較して現在「お―なる」形が中核となっていることを、国立国語研究所の『敬語と敬語意識』の反応文によって確認している。

このように長い期間にわたる論文をまとめたものであるから、関係事項を読み合せる必要がある。そして著者はこの点からも細心の注意をはらい随所に「付記」を新しく加えている。この点からは、巻末の索引を十分活用する必要があり、これにこたえられるよう特に配慮して作成せられている。

それにつけても、補助動詞の「てさしあげる」は、「敬語変遷一覧表」の282ページに挙げ、その用例が227ページにあげてあるのに、索引に落ちているのは残念である。索引の作製の困難さを思い知らされるのである。

五

本書には付録として42ページにわたる「敬語変遷一覧表」が添付されている。これは敬語に関心を持つものにとって、まことに便利・有効な表である。

この表は、「従来の研究では明らかにされた敬語変遷を語彙中心にまとめた」（329ぺ）ものである。そして作成の具体的目的は「日本語の敬語表現が、上代から現代に至るまで、どのように変遷してきたかを一覧できるようにというところにあり、この表の完全を期して、桜井光昭氏の協力を得ていられる。

たとえば、「くださる（る）」（氏の下位主体語。三分法での謙譲

語）は、中世後期から例が見えており、近世に及び、上位主体語（三分法の尊敬語）から転じたものであることが一覧してわかるように作成してある。そして用例出典については、「従来の研究を参考にし、なるべく古いものを挙げるようにした」と述べるとともにまた「必ずしも初出例にこだわらなかった。」と断っている。この一見矛盾した表現は氏の学問的純粋性と慎重性とを示していて、心から敬意を表する。この類の表の重要事項は、発生については、その初出例であり、衰滅の語については、その最後の例である。この二者の確定は、現在のような敬語研究の実情からは、完全無欠の整理を要求することは不可能である。それだからこそ、現時点において、一般的研究のレベルにおいて何処まで判明しているかを、整理しておくことは、極めて重要なことであり、是非必要なことである。しかし、将来訂正を必要とすることを考えただけでも、大きな勇気が必要なことである。これをあえて実行されたことは快挙と言うべきである。したがって、この表に多少の、又は将来変更を加えるべき事項が仮りにあったとしても、それは非難してはならないことである。こうして、この表は国語研究者にとって、便利な参考文献になることは言うまでもないことであるが、又他面、敬語研究者にとっても利用価値がはなはだ高い。これを基礎として、未発表の資料を持つ各人は、それらをこの表に記入し、各自の表を作成し、自己の研究の出発点とすることができる。一例を挙げれば、対称代名詞「あなた」は、近世において他称より転用され、現代に及んでいることが表示されている（396ペ）。そしてその用例出典欄には、『難波丸金鶏』が挙げてある。これは、湯沢幸吉郎氏が発見された初出例を挙げてあるので、これはこれとして現時点においては意味がある。しかし、対称の代名詞の「あなた」は、『難波丸金鶏』（宝暦5年・1755）より15年以前の元文5年（1740）刊の『軽口福於可之』巻二に次のように見える。

わたくしは、あなたのお名をかすめし故か、客衆もさびしくおやかたの顔もちもわるふござりす。どうぞ一はやりにぎにぎと致ますように、まもらしやって下されかし（4ウ）

この例は嶋原の天神職の傾城のことばであることも興味を引く。ともかくこのような例の確実性が検討されると、この例の価値が定まる。価値が確定すれば、表の訂正となる。このようにして検討の基礎となり、又よりよい表の作成が多くの人に可能になる点においても、利用価値は高い。

六

なお本書には、「Ⅲ敬語研究史」があり、敬語研究を大観することができるが、ここでは割愛せざるを得ない。

本書を一応読み終えて感ずることは、いつものことながら、氏の文章の平易・流麗さである。とかく堅苦しい用語・理解しにくい表現になりがちなこの種の学術論文であるのに、よくもこんなにスラスラと楽しく読ませる文章が書けるものだとほとほと感服する。

この書は既述のように、すぐれた定評のある論文のまとめられたものであるが、具体的にはその一部にしか触れられなかったことは残念である。そして妄言多く、失礼な結果になったのではないかと恐れる。つつしんでお許しを請う次第である。この書の刊行を契機として、敬語研究が一段と発展することを願いながら、筆をおくことにする。

―群馬大学教授―